



Title	『景社紀事』簡介および影印
Author(s)	堤, 一昭
Citation	懷德堂研究. 2023, 14, p. 33-67
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/94540">https://hdl.handle.net/11094/94540</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『景社紀事』簡介および影印

堤 一昭

本稿は、西村天囚が興した大阪の文会（自作の漢文を持ち寄り、批評する会）「景社」の規約・同人・例会の活動を漢文で記した『景社紀事』の概要を紹介し、その画像を示すものである。この『景社紀事』は同人らの手による自筆原本であり、記載は明治四十四年（一九一二）から大正五年（一九一六）に及ぶ。この時期に天囚は懐徳堂の復興にむけて尽力していた。当時の大阪・京都の漢学・東洋学の主な人物の交流を知る手がかりとなる貴重な資料である。西村天囚はじめ同人らの他の資料とも対照して、新たな知見を得る手がかりとなれば幸いである。<sup>①</sup>

二〇一八年十一月、石演の没後五十年を記念する国際シンポジウムが関西大学で開催された。筆者はそこでの報告を依頼されたことを機に、同年八月から石演文庫の未整理資料の調査を行い、彼の東京帝大在学時代の論文、その他の自筆ノート類とともに『景社紀事』を見いだした。報告の後、概要を「石演文庫所蔵石演純太郎自筆稿」本類の発見―明治末年の「支那文学科」の学修、大正初年の「文会」の資料として―<sup>②</sup>で速報した。また、「石演純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか?―新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて―」<sup>③</sup>では、『景社紀事』の記

『景社紀事』は現在、大阪大学総合図書館の石演文庫に所蔵される。石演文庫は、大正から昭和四十年代初に活動した東洋学者・石演純太郎（一八八八～一九六八）の蔵書ほかの研究資料を収める。彼は敦煌学、ニコライ・

ネフスキーと共に取り組んだ西夏文字の研究、富永仲基ら近世以来の大坂の学術研究などで知られ、一九五〇年には懐徳堂記念会の事業運営委員を委託されている。<sup>④</sup>なお、石演は天囚の紹介で景社に大正五年四月二十五日から参加している。<sup>⑤</sup>

述をもとに表1「景社題名に見える同人一覧」、表2「景社会合一覧」を作成、掲載した。その後、関西大学の研究者との「内藤文庫および石演文庫所蔵資料の調査と整理に関する共同研究」により『景社紀事』を撮影し、ここに画像を公開することを得た。<sup>⑥</sup>

『景社紀事』の概要は次の通りである。

#### A. 体裁

縦二五cm×横一七・五cm 紙縫綴じの抄本一冊。表紙除き三九葉だが、書き込みがあるのは最初から二九葉まで。葉数表記なし（以下の葉数表記は、筆者が本文の一枚目から数えてつけたもの）。表紙左肩に外題「景社紀事」直書（本文との比較で西村天囚の書と分かる）。本文は青い墨の「景社文稿」原稿用紙に、墨書（一部朱墨、朱印あり）。二九葉裏には、以下の三紙が挟み込まれていた。①「景社文稿」原稿用紙に記された会合記録の書きかけ一枚、②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（大正七年一月廿五日の少し前から十月にかけての月日が記される）、③昧々先生あて石演純太郎書簡。

#### C. 景社題名（3葉表～5葉裏）

同人名を列挙した「景社題名」には、二七人の氏名や通称、字号、出身地、入社時の年齢、住所が順に記される。なお、29葉裏には、狩野直喜ほか六人と小牧昌業の計七人の氏名と住所が記される。「景社題名」の部分と4人が重複する。29葉に記載の人物も含めると全体で三十人について記されている。

#### D. 景社紀事（7葉表～28葉表）

「景社紀事」は本冊子の題名であるとともに、毎回の幹事（各回の末尾に「幹事某某記」とある）がまわりもちで担当した会合の記録である。冊子自体も次の幹事へ回されていったと考えられる。記された最後の幹事が畠山逸であるのに、石演の手元に『景社紀事』が残った理由は未詳である。記された会合は合計二六回。

以下、表紙から記載のある最後の29葉まで、および上述の三紙①②③の画像を示す。

#### B. 景社同約（1葉表～2葉表）

冒頭に「景社同約」と題され、末尾には、「明治四十

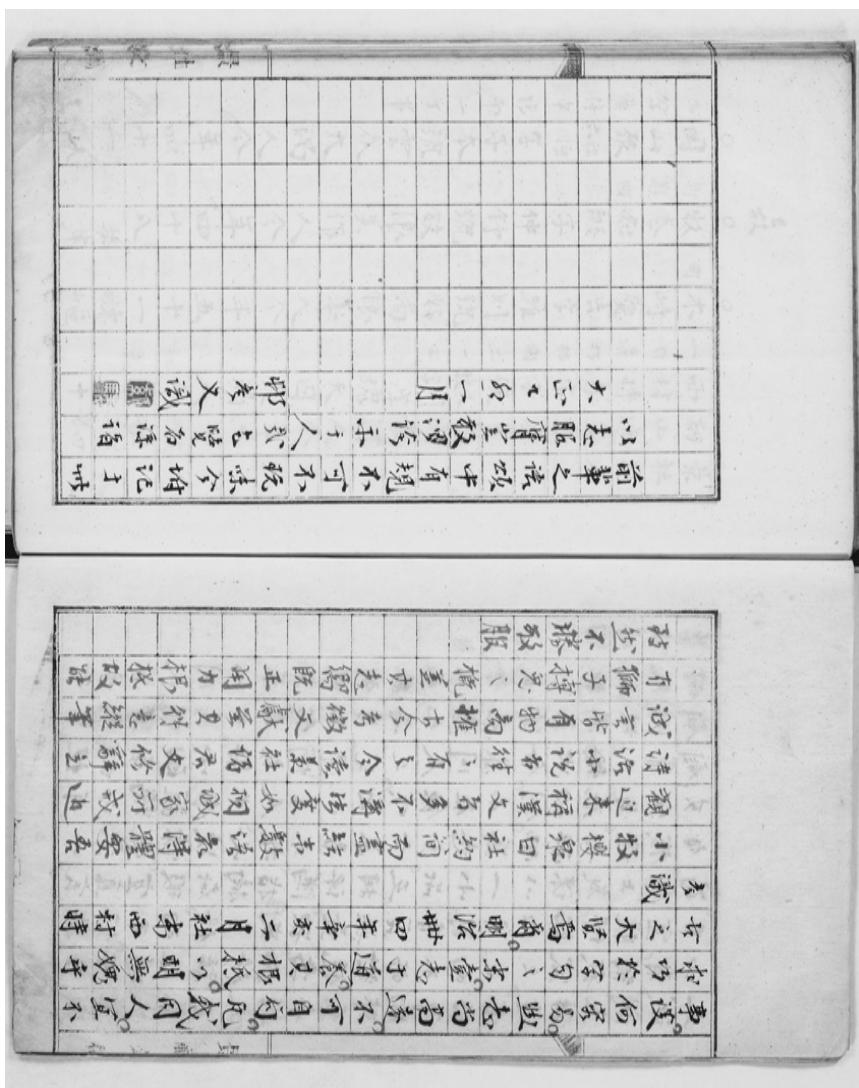
四年辛亥二月社末西村時彦識」の識語がある。行を変えて1葉の最後まで朱墨の同筆で小牧櫻景の社約についての発言が引用され、2葉表の冒頭からの附記の最後に「大正乙卯一月郵彦又識」とある。



表紙

景社同約。故所以成其社友也。社何故能景。以同人皆志於賢。而所用角列。故禹舉賢之意也。每月一食五日為明。發為養。而廟寶日輪次會。集同人之空處燭教將。小的孝病。但良序。席上或課一小此。互相評讐。指病諫過。宜直言。一自戲謔。勿辭鄙。篤志士。來者莫拒。以後懷。近榮。一自貞宗。旨有抑制。不在于侈。嗤是心主人供食。該猶尚可。

表紙見返し／1葉表



1 楊襄の2葉表

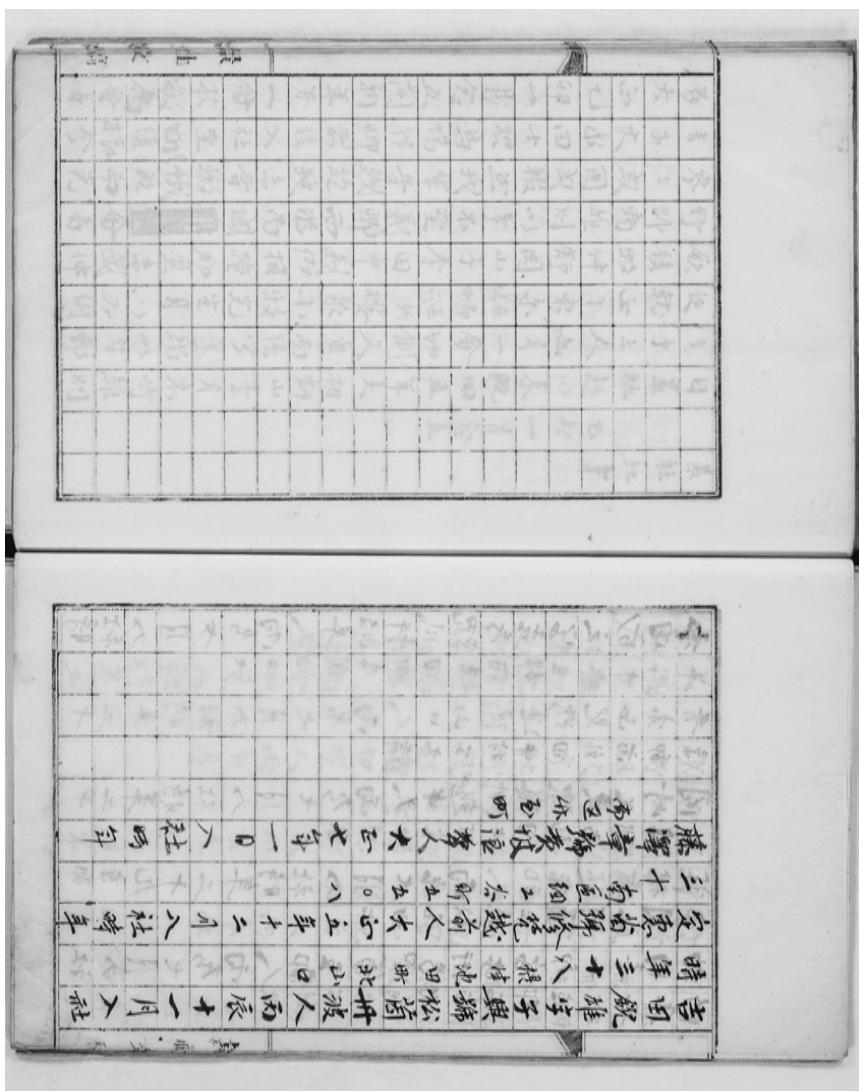
景社題名	荆山送客李才子和參河人今奉少十	西村時考字子俊又明學城天回大渴人今奉五十一	一本崎愛山字維則疏懶尚動舉人今奉五十八攝津	町一本崎愛山字維則疏懶尚動舉人今奉四十八攝津	牧菴熙隱字仲舒號散人吳作人今奉四十八攝津	御影回山農淳子本源雪人大渴人今奉四十	因山農淳子本源雪人大渴人今奉四十
------	-----------------	-----------------------	-----------------------	------------------------	----------------------	--------------------	------------------

2葉裏 3葉表

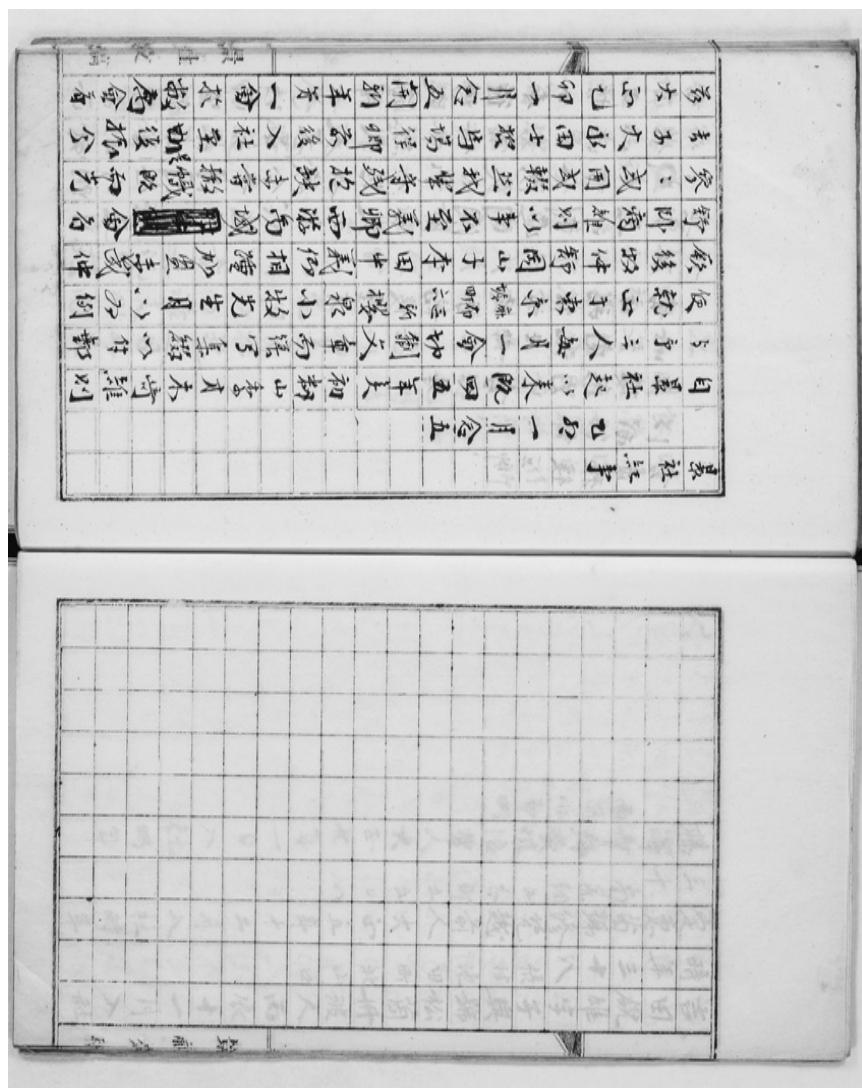
○ 田中直林 直林字誠師，號於江浦，人今年四十八，西	○ 光吉元 次林九，字子大，號達菴，人今年四十四，神	○ 馬永 永，號大林，字子大，號御源，人今年七十四，神	○ 横澤元 次林九，字子大，號鶴臯，人今年四十二，東
○ 成郎中清 次林九，字子大，號御源，人今年四十八，西	○ 故郎中清 次林九，字子大，號達菴，人今年四十四，神	○ 奥明平 次林九，字子大，號御源，人今年七十四，神	○ 田中秀 次林九，字子大，號御源，人今年四十二，東
○ 马國元 次林九，字子大，號御源，人今年四十八，西	○ 光元 次林九，字子大，號達菴，人今年四十四，神	○ 横澤元 次林九，字子大，號鶴臯，人今年四十二，東	○ 横澤元 次林九，字子大，號御源，人今年四十二，東
○ 田中直林 直林字誠師，號於江浦，人今年四十八，西	○ 光吉元 次林九，字子大，號達菴，人今年四十四，神	○ 馬永 永，號大林，字子大，號御源，人今年七十四，神	○ 横澤元 次林九，字子大，號鶴臯，人今年四十二，東
○ 田中直林 直林字誠師，號於江浦，人今年四十八，西	○ 光吉元 次林九，字子大，號達菴，人今年四十四，神	○ 馬永 永，號大林，字子大，號御源，人今年七十四，神	○ 横澤元 次林九，字子大，號鶴臯，人今年四十二，東

3葉裏の4葉表

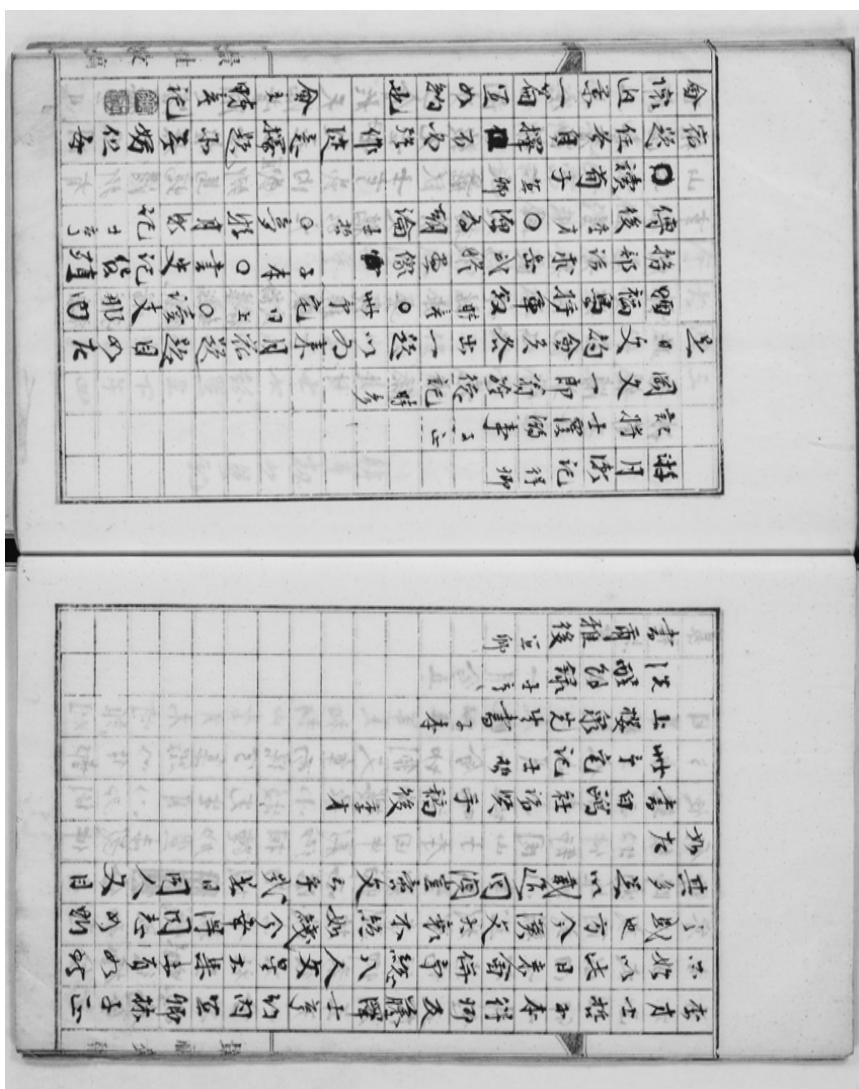
4 葉裏 5 葉表



5 藥業の業表



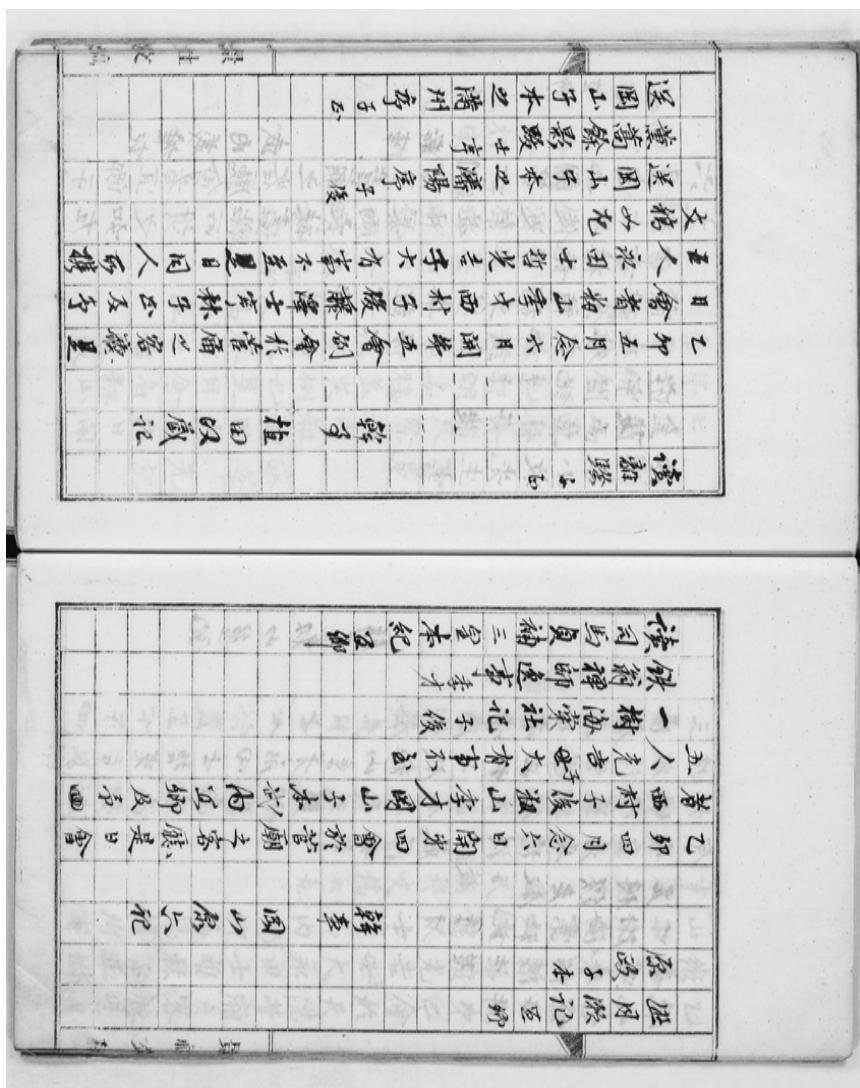
◎葉裏了蕪表



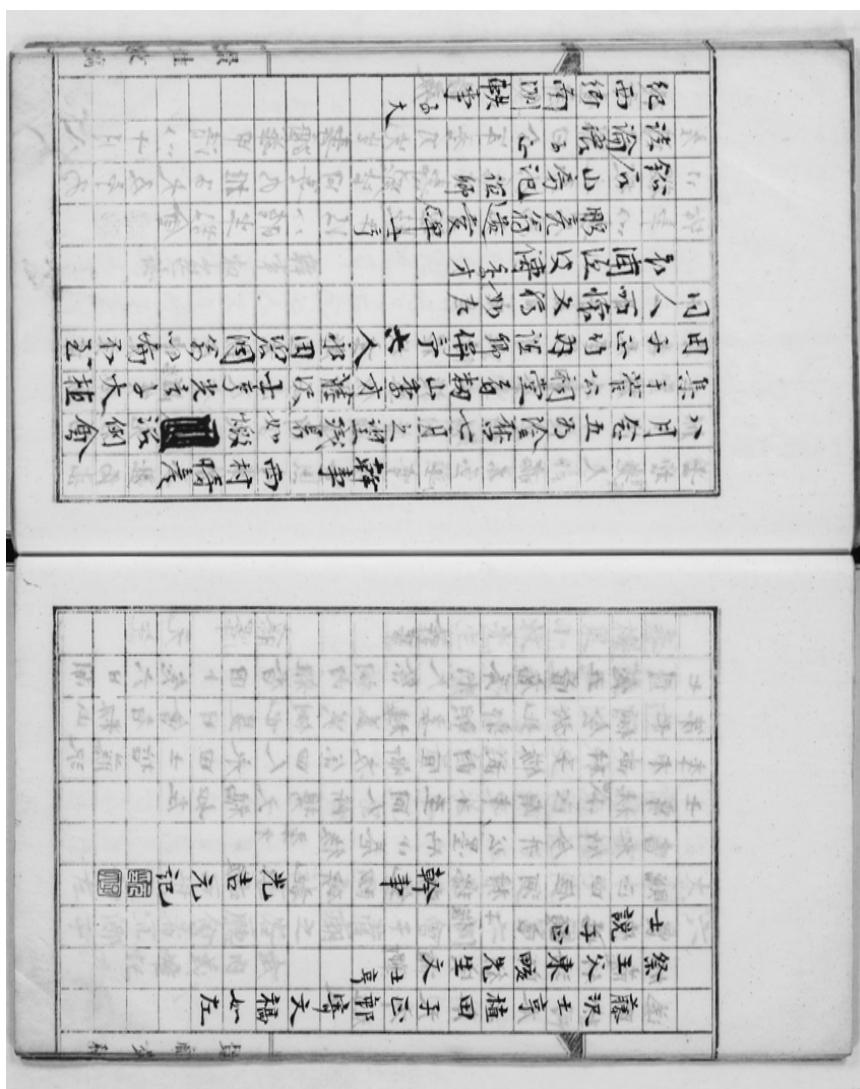
7葉裏 8葉表

己卯二月念三聞中二會於天壇 崇廟之客廳是日有	微西會者西鄉子俊光告于大永田士哲林子正國	事不盡是日同人所撰文稿以	此辛未記丁巳後	讀文那內聯詩詣宋東坡蘇武論素能後	為宋輔草堂毛老方縣處才	博荀子子推	三月金五日宿崇廟	時乃待賀舉而村子枝柳山季才郎四士哲覺音古子	大抵內互以林子正令愛其人頗相樂焉是歲癸巳	今不至高此揚得御蕭澤子嘗	龍傳從老叔子俊	耆買牛帳源士培	此多金記子正	懷德堂研究 第14号 令和5年2月28日												
此辛未記丁巳後	讀文那內聯詩詣宋東坡蘇武論素能後	為宋輔草堂毛老方縣處才	博荀子子推	三月金五日宿崇廟	時乃待賀舉而村子枝柳山季才郎四士哲覺音古子	大抵內互以林子正令愛其人頗相樂焉是歲癸巳	今不至高此揚得御蕭澤子嘗	龍傳從老叔子俊	耆買牛帳源士培	此多金記子正	懷德堂研究 第14号 令和5年2月28日	己卯二月念三聞中二會於天壇 崇廟之客廳是日有	微西會者西鄉子俊光告于大永田士哲林子正國	事不盡是日同人所撰文稿以	此辛未記丁巳後	讀文那內聯詩詣宋東坡蘇武論素能後	為宋輔草堂毛老方縣處才	博荀子子推	三月金五日宿崇廟	時乃待賀舉而村子枝柳山季才郎四士哲覺音古子	大抵內互以林子正令愛其人頗相樂焉是歲癸巳	今不至高此揚得御蕭澤子嘗	龍傳從老叔子俊	耆買牛帳源士培	此多金記子正	懷德堂研究 第14号 令和5年2月28日

9葉裏 10葉表



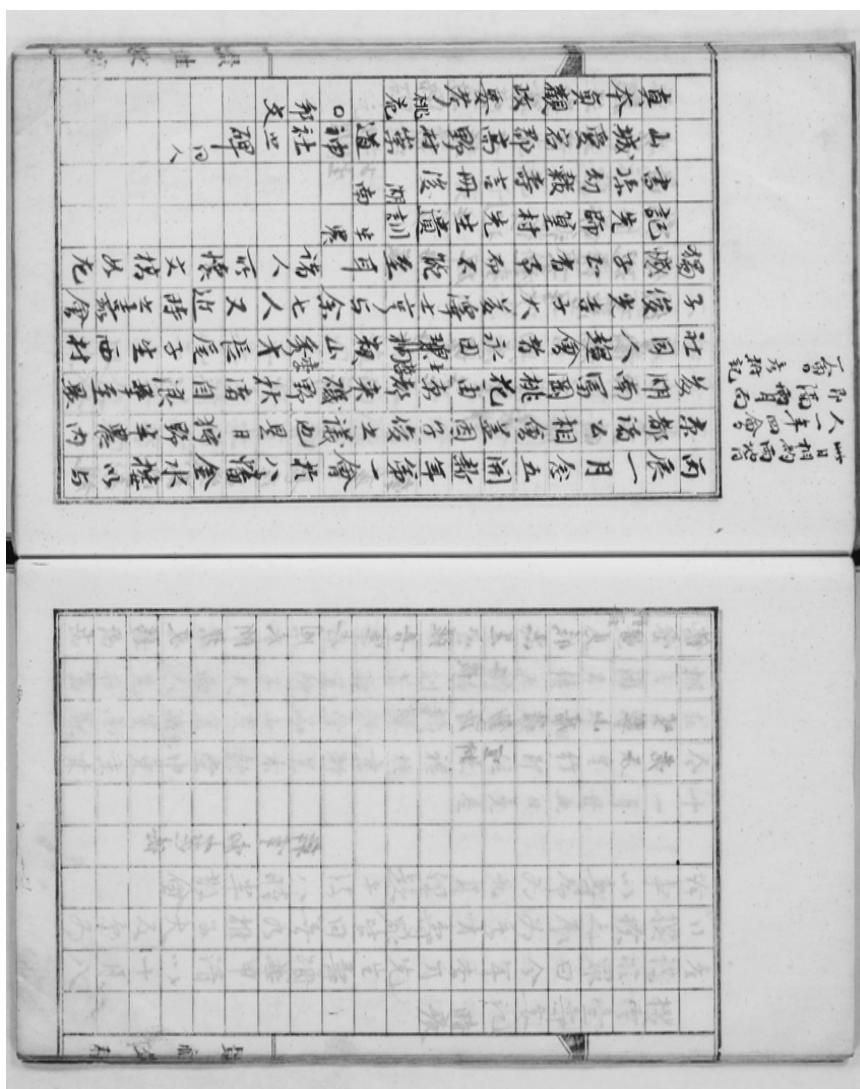
七日食五管齋奉行大祭祠內雜沓因卜念六日開  
紫七例會於此部朝妻樣蓋嘗例也是日會者叔山  
李才過村子恢武內宜卿及余四人永田土壠  
士卒楊正正肩事不至同人所携入福如左  
書木竹今升公墨竹小巷後年才  
贈正四住河村瑞新絕切碑記子俊  
買牛帖贊言子俊  
加藤行海師行宋官卿  
送岡山子本之春天孝母  
元祐



11 蘭表 12 葉表

十一月廿五日	先老	今上天宮行御 介木禮於京新呈木飲堂中陳京未	在玉新冬日	金玉後宴飲堂而山及念膳食向歲	加之昨年後上時憚到昔廟宣所子大雨人先在官	士始老人心病不亟士苦子之六苦等不亟而山	飲堂醫見候志以張吾軍此因人所携文移少左	老子	壁翠山房得錄序李才	釋事和定林	長住此病
--------	----	--------------------------	-------	----------------	----------------------	---------------------	---------------------	----	-----------	-------	------

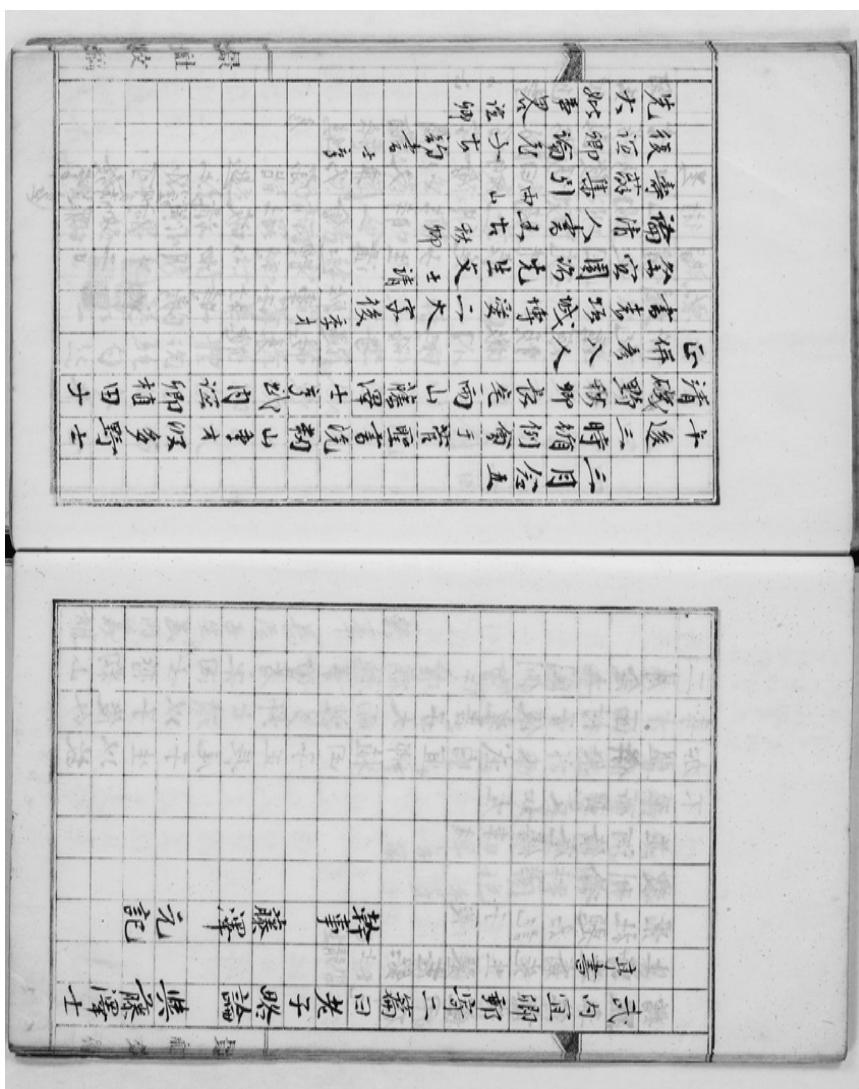
12葉裏 13葉表



13 葉裏 14 葉表

正五	將	上野敬齋先生墓志銘	謂
五位	井鹽田碑元	景社題名記于後	教刑論士悲
並河脩庵傳李才	不至而譜文如左	並河脩文如左	並河脩庵傳李才
加盟併余六人武內宜卿植由子正長尾子生以不至而譜文如左	季十西村子俊光吉子大而波多野士清以子俊从	季十西村子俊光吉子大而波多野士清以子俊从	加盟併余六人武內宜卿植由子正長尾子生以不至而譜文如左
二月念五閏例會于浮屠事會者永田士哲炳山	二月念五閏例會于浮屠事會者永田士哲炳山	二月念五閏例會于浮屠事會者永田士哲炳山	二月念五閏例會于浮屠事會者永田士哲炳山

14葉裏 15葉表



15葉裏 16葉表

淪支那山事上  
書當與公了了學會論後  
是日參發議曰的會以人車乃家臣此  
術也漏月或滿二月臨時一會清社友清  
質之因先清長先生清之體行心四月十二日  
沂海領教撒門好酒子隨至東坡  
次明皆質之因先清長先生清之體行心四月十二日  
時秀

紙原及此句為律約一時三十多間講畢一酌送客二  
次後四時會手書有詩洗季才雨山子大浪師丁正  
午及未并上野市的小山並酒肴希薄淳體微殊白之今井  
費一等送三十餘人雨山並酒肴希薄淳體微殊白之今井  
次後四時句為律約一時三十多間講畢一酌送客二  
次後四時會手書有詩洗季才雨山子大浪師丁正  
午及未并上野市的小山並酒肴希薄淳體微殊白之今井  
費一等送三十餘人雨山並酒肴希薄淳體微殊白之今井

16葉裏 17葉表

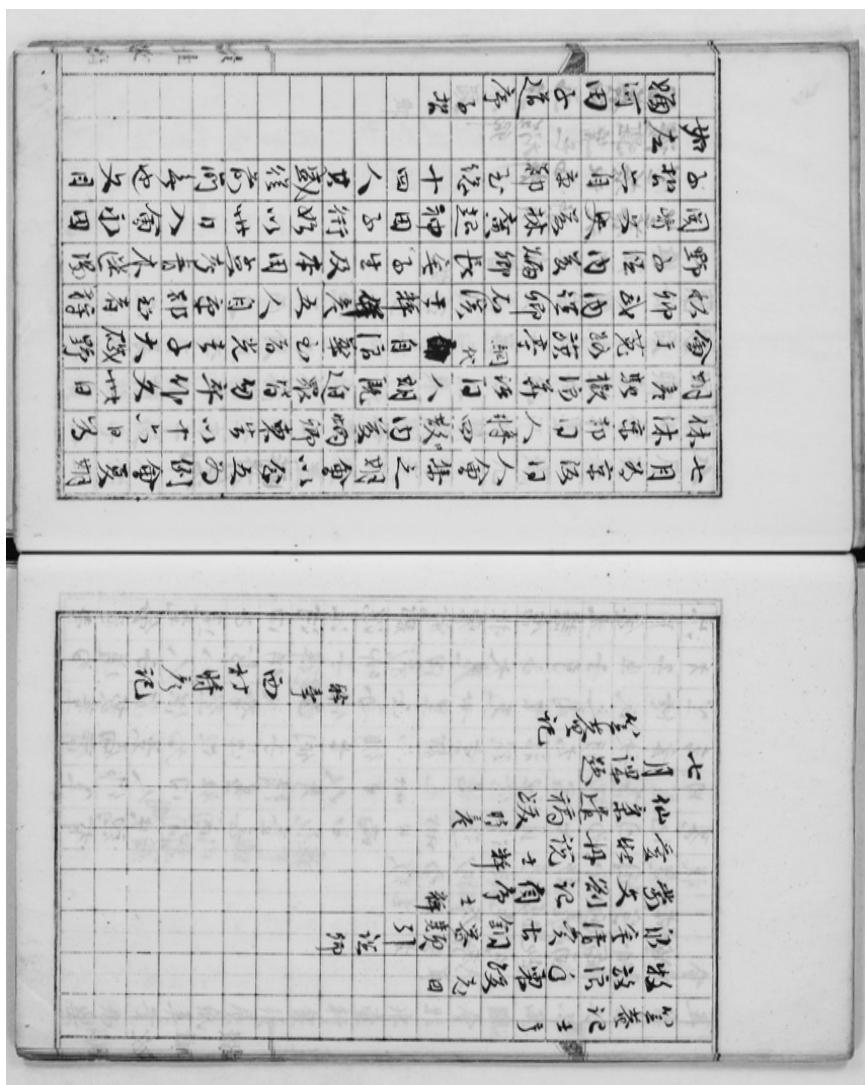
元純子正宜鄉讀大學會記  
天因書序巡幸詩草序  
衣洲上樞泉小牧先生書  
天因書序巡幸詩草序  
宜鄉讀大學會記  
子正上君山倚野先生書  
復天四西村先生書  
江蘇南白快事  
幹事光吉元記

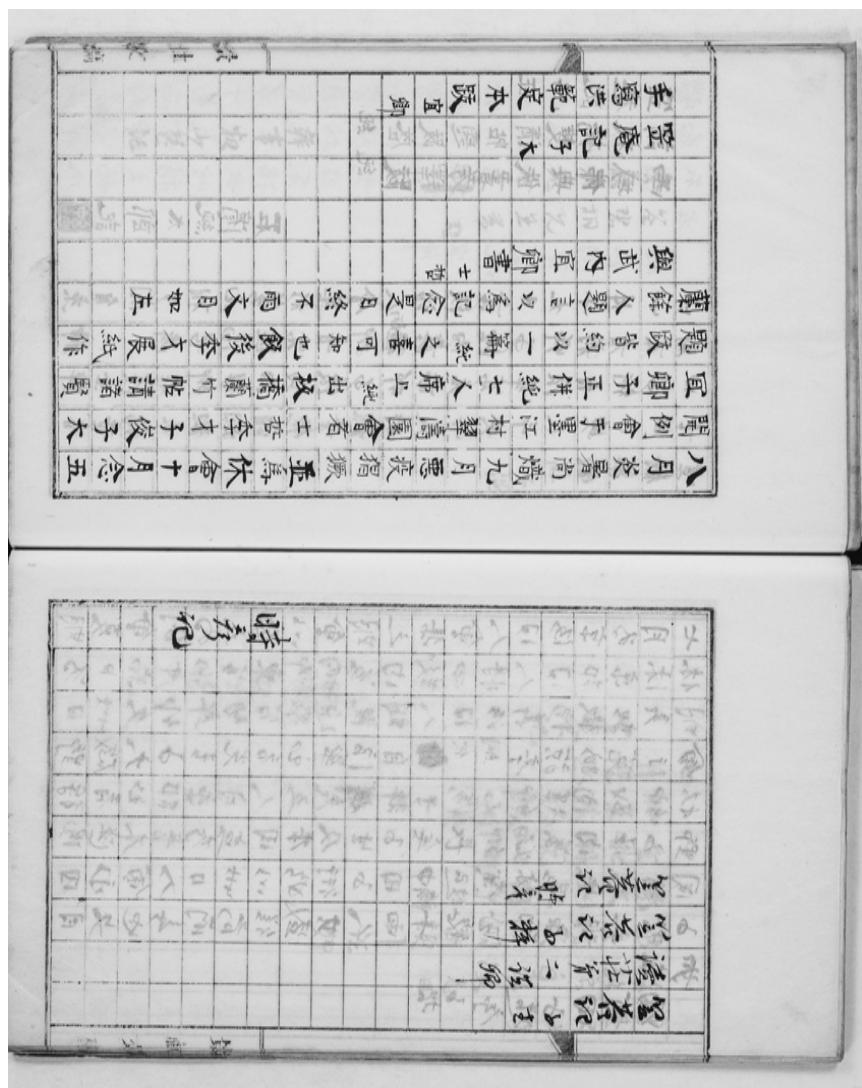
五月念七小雨潤會於水盛軒飯後展紙弄筆為與  
會者唯有一人耳  
袁古文鵝遙此賦

景社文稿

18葉裏 19葉表

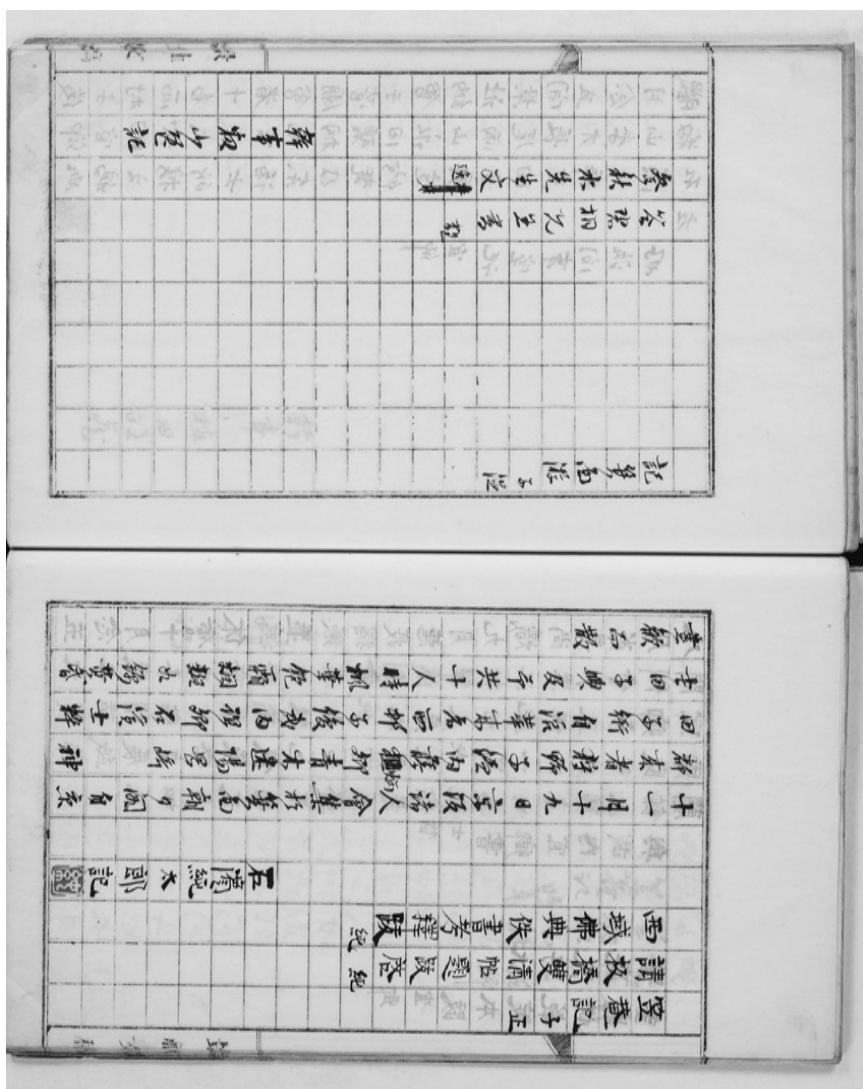
19葉裏





20葉裏 21葉表

21 菊裏の22葉表



22	葉裏23葉表
左	右
行	行
法	法
向	向
事	事
室	室
記	記
食	食
神	神
右	右
瀆	瀆
禮	禮
走	走
因	因
子	子
興	興
定	定
修	修
梵	梵
及	及
余	余
涌	涌
士	士
所	所
携	携
大	大
本	本
內	內
官	官
之	之
鵠	鵠
山	山
才	才
長	長
尾	尾
雨	雨
山	山
水	水
日	日
曉	曉
祠	祠
社	社
納	納
會	會
子	子
宮	宮
廟	廟
會	會
者	者
十	十
名	名
而	而
村	村
子	子
後	後
臘	臘
目	目
念	念
五	五
開	開
黑	黑
社	社
納	納
會	會
子	子
宮	宮
廟	廟
會	會
者	者
十	十
名	名
而	而
村	村
子	子
後	後

丁巳一月念五日會於高津祠畔望煙亭會者長尾  
子生武內直卿波多野清西村子俊及余五人  
而携文者無有乎爾有示如遺故不記

幹事藤澤元記

23葉裏 24葉表

指田子政石瀆士群與余五人此日諾士而摶爻在  
神田子術國人間浪華至者杓山李才而村子復  
者得野子溫內藤焰浦小島郡波佐佐美

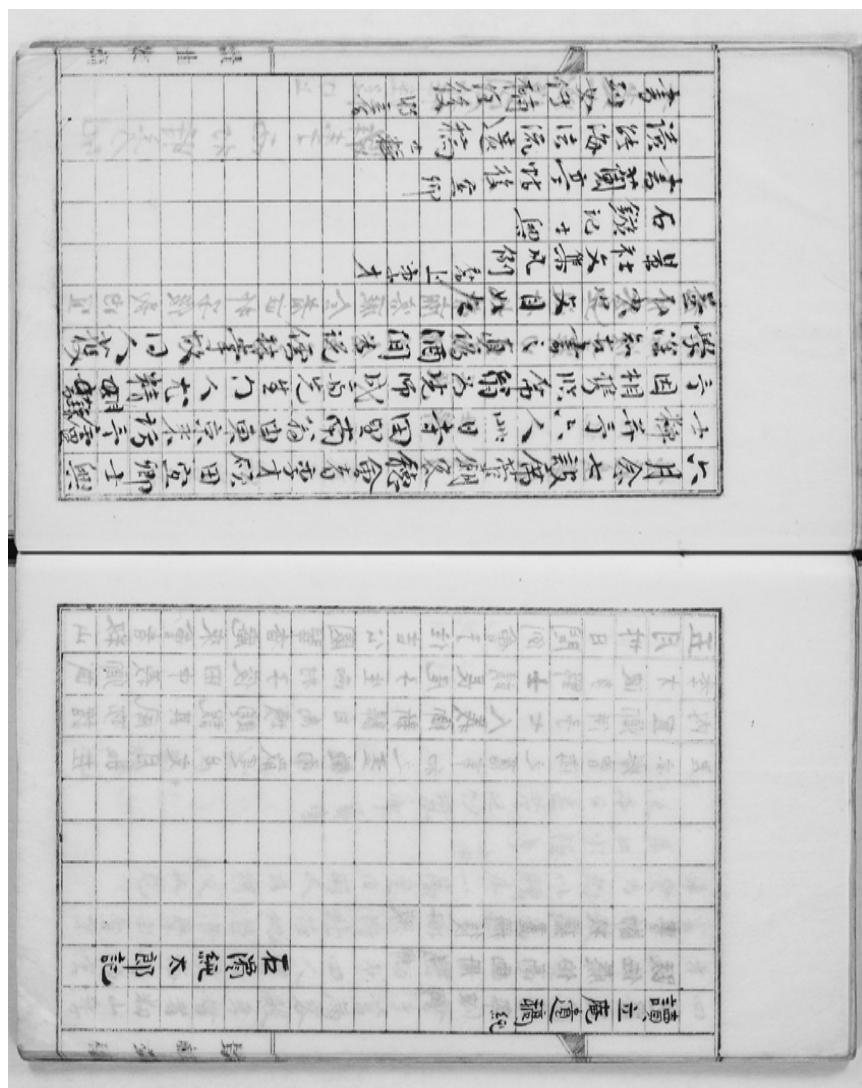
24葉裏 25葉表

四月食五司風社例會于省萬春殿來會者如山李才西村子俊李田子學佑等四人置檻鋪筵神官宣室舉鑑擬校為陽田而長條垂注徑地遇津率由告善參會不約以贍序一篇題目同人而相反而尤是其江水續序予與  
道本日本之印象而實惟  
野內為確記

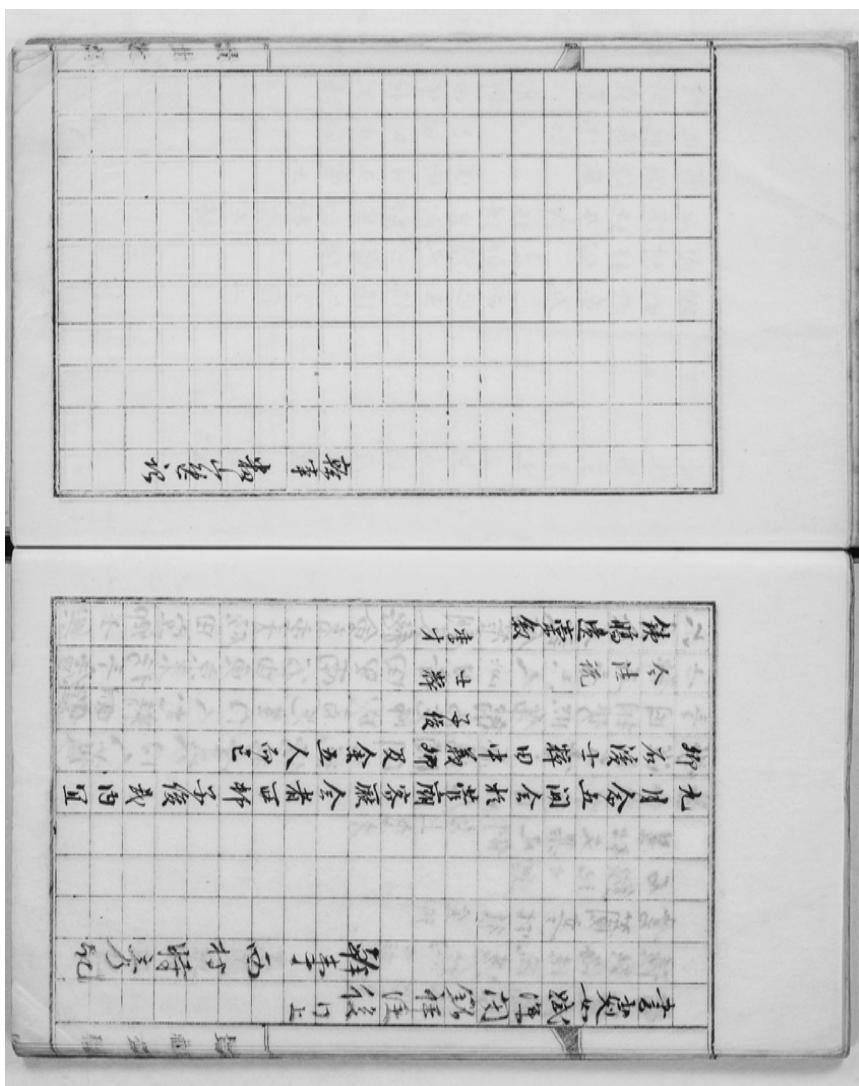
五月卅日閏例命于住吉公園翠香庵來會者叔山  
李才波多野士謂長尾子生西村子俊田中義彌  
內宜間併予七人羲圃新歸自禹域贚說其風物諸  
君示舉曾海之舊事和之盡徵而取是日文曰叔左



25葉裏 26葉表



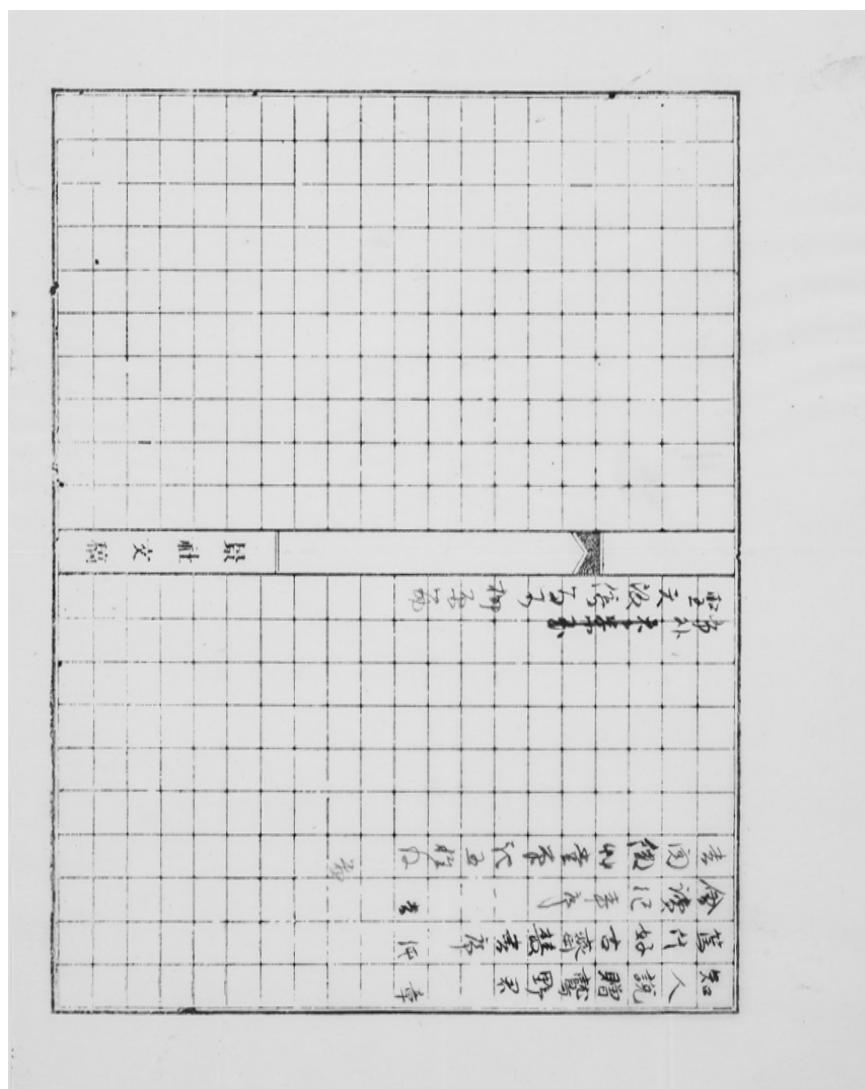
26 葉裏の27葉表



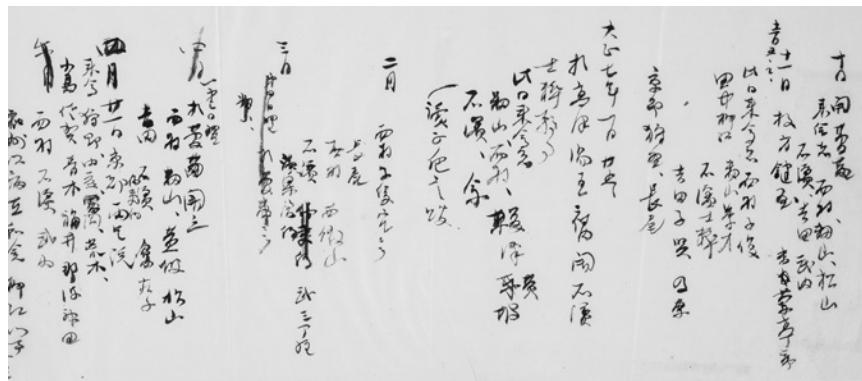
27葉裏 28葉表 (28葉裏 20葉表は記入なし)

小牧昌景先 東京市麻布区新橋町	
内村邦藏 東都清水二重後 西区土佐區二丁目	
富岡謙蔵 吉田町立賣上 内藤彦次郎 中田大溝 前田良殿	
狩野直喜 東都中村大溝 前田良殿	
内藤彦次郎 中村大溝 前田良殿	

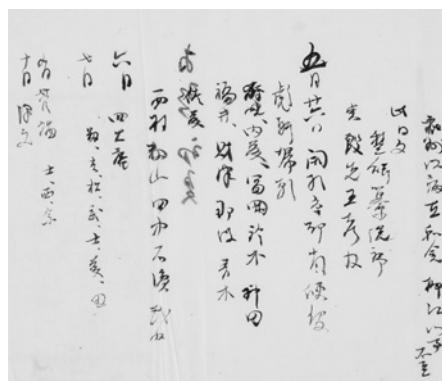
29 葉裏30葉表



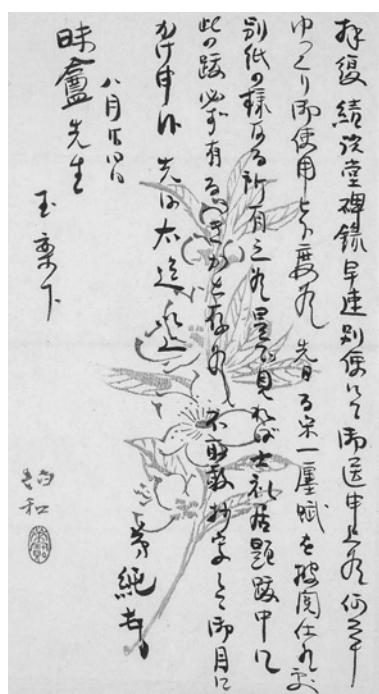
①全品記録の書きかけ一枚



②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（前半）



②巻紙に記された年次記録の草稿らしきもの（後半）



③昧蘆先生あて石濱純太郎書簡

注

(本稿では、諸文献で「石浜」「石濱」が用いられている場合も「石濱」に統一した。)

(1) たとえば近年発見された西村天因関係資料中の「景社題名第三」は、「景社紀事」(20葉表裏)等と対照すると、大正五年(一九一六)七月十六日の京都の麗澤社、大阪の景社の第三回連

合会で作成されたものであることが判明する。この「題名」については湯浅邦弘「西村天因の知のネットワーク—種子島

西村家所蔵資料を中心として—」『懷德』八七号、一〇一九年、一七〇一九頁、および同「石濱純太郎・石濱恒夫と懷德堂」、

吾妻重二編著『東西學術研究と文化交渉—石濱純太郎没後50年記念国際シンポジウム論文集』関西大学出版部、二〇一九年、二九〇—二九一頁参照。

(2) 「懷德堂記念会年表」「懷德堂記念会百年誌」財団法人懷德堂記念会、二〇一〇年、四四頁。

(3) 「景社紀事」17葉裏。なお後述の拙稿「石濱純太郎は、いつ内藤湖南に出会ったのか?—新出資料『景社紀事』の紹介を兼ねて—」参照。

(4) 『待兼山論叢・文化動態論』第五二号、二〇一八年、二一〇三九頁。

(5) 前掲の吾妻重二編著『東西學術研究と文化交渉』二九七—三一六頁所収。表1は同人二七名の氏名・通称・字號・出身・

入社年月・年齢などを載せた。なお通番十一の武内義雄の通称欄に「元造」とあるのは表の右隣りの藤澤元の通称の誤記で、訂正したい。表2「景社会合一覧」は全二六回の開催年月日・場所・幹事・出席者などを載せたが、各回の概要記述と同人が持ち寄った作品の題名は割愛している。またその注16には『待兼山論叢』所載の拙稿の訂正を載せる。

(6) 筆者は前二稿(注4、5)の段階では翻印を予定していたが、景社同人らの筆跡をも知りうる影印を公刊することが急務と考えた。本稿は、関西大学研究拠点形成支援経費(二一〇二〇—二一年度、代表:玄幸子教授)の成果である。